

「見立て」による幼児造形の教材研究

岩 田 健一郎

A Study on Teaching Materials of the Modeling by Infants with
“to Liken a Thing to Another”

Kenichiro Iwata

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別冊

平成 30 年 2 月 28 日 発行

「見立て」による幼児造形の教材研究

A Study on Teaching Materials of the Modeling by Infants with “to Liken a Thing to Another”

岩田 健一郎

Kenichiro Iwata

1. はじめに（研究目的）

造形の授業は保育指導法表現の内容を踏まえ、材料と用具を使い、イメージをもとに具体的な形、色、そしてテクスチャー（材質）による製作、表現を通して造形的な感性を陶冶し、また幼児造形の指導者としての資質を求め製作体験をしている。幼児の活動に置き換えるなら、材料と用具を伴った特に手の動きさらに表現行為に伴う身体表現、感性、思考が一体となった表現活動そのものであることが幼児造形教育の意義に挙げられる。

平成2年度の幼稚園教育要領及び保育所保育指針では幼児の主体性を育てる内容が盛り込まれ、自由遊びも重要視され様々な試みを取り入れられてきた。しかし、その後30年経った現在の改訂でもこの主体性の育成について教育・保育目標の一つの柱として変わっていない。言い換えれば、1960年・70年代の幼児の取り巻く環境から比べ、今日の社会、幼児の生活形態や生活環境、地域性や家族形態など変化により幼児の造形的な遊びなど、材料・用具に関わる日常生活が困難になっていることが多くの研究者から指摘されている。

保育指導法の「表現」や小学校の学習指導要領の「図画工作」の内容に材料との関わりや工夫を通して、幼児や児童の主体性を育てることについても述べられているが、今日の学生も平成2年以降に生まれ、今までえがいたり、つくったりする造形に使用する材料用具に係わる生活が希薄になってきているのか、近年、造形活動を苦手にする学生の傾向を感じている。そういったことを踏まえて、近年、学生の製作、興味関心が高まりイメージの広がり易く、さらに幼稚園や保育所でも取り入れられ、幼児も製作可能である紙皿、紙コップの製作を授業の教材に取り入れ実践している。教材の領域設定では、えがく領域、つくる領域、そして造形あそびの領域に分けられるが、紙皿、紙コップによる製作は、材料そのものから動機付けや発想を促す造形遊びの領域に入り、これらの材料を使った製作をとおして指導者になるための学生自身の主体的な製作体験を通して発想の広げ方や取り組み方を考察するとともに幼児の製作に活かせる教材の可能性を述べてみたい。

2. 紙コップ、紙皿による「見立て」活動について

本学「こどもと造形表現Ⅰ」のテキストの教材の領域設定の目安として、えがく領域、つくる領域、そして造形あそびの領域に分けている。えがく・つくる領域は、生活体験で蓄積された心象・イメージまた直接的な感動体験、あるいはつくって遊びに使ったり、飾ったりする目的達成のために表現(製作)に対して造形あそびは、材料・用具との出会い、それらのやり方などをもとに操作体験することを通して、そのプロセスを楽しむ経験することにより、多くの形や色などの造形的なことを経験することが目的の遊びである。そしてこれらの活動を通して、視覚的、触覚的な五感を通した探索活動により形や色の発生、それらの見立て(読み取り)、意味づけ、そしてイメージの広がりをおこなっており、これらの造形あそびは、えがく・つくる活動への発展につながるケースもある。テキストの造形あそびは、「空間遊び」「材料遊び」「構成あそび」そして「みたて遊び」とあくまでも教材研究の分類として分けているが、その中の二つ、あるいは三つの要素が重複しているものもある。

本稿は造形あそびの領域を挙げるならば、紙皿・紙コップという材料遊びから始まり見たて遊び、また構成遊びの要素も入るが、材料から見立てることを主にして述べていきたい。

槇英子は、次のように三つの指導形態を分類している。一つ目は、「教師主導」¹⁾として、直接的な援助中心完成形を示して手順どおりに指導する。製作内容やえがき、つくり方を提示しながら製作する方法、二つ目は、「子ども主導」²⁾として、間接的な援助中心物的・空間的環境だけを設定して子どもたちの自由に任せる。いわゆる自由遊びの中での製作である。そして三つめは、「教師誘導」³⁾として「教師指導」と「子ども主導」のどちらも取り入れた(直接的な指導と間接的な援助)の指導で、テーマは共通で画材の選択は自由、保育者が目新しい材料を提示して試みを促すといった指導形態である。「子ども主導」は、子どもの自由度が広がれば自己決定の選択肢が広がるかといえばそうではなく意欲が広がるわけではない。子どもたちの自発性を尊重しながら主体的な表現活動を満足させやりたい活動を保障することが大切であり、放任的な保育はかえって現代の子どもたちが不自由を感じるケースも考えられる。

このことは専門の画家や造形作家が表現の自由を保障されているようであるが、材料の選択をしたことにより、その材料の特性などから技法等を制約されながら表現していることと同じである。したがって、遊び(活動)を保育者が育ててほしい願望やねらいを意識しながらそれらを達成するために条件をつけながら遊びを仕掛け、子どもに興味関心を持たせ、自由な発想を引き出す、いわゆる誘導型の保育も必要不可欠である。

(1) 素材から「見立て」による製作

学生の教材研究は、幼児の製作可能なものであっても、学生が授業で製作経験をすることにより、素材体験、製作における技術的な問題点や造形の美しさなどなどプロセスを通して多くのことを考え、感じながら主体的に製作することが大切であり、このことが幼児の援助の自信や製作のプロセスのポイン

トを理解し、指導に繋がっていくことは言うまでもない。そういったことを踏まえながら実践している紙皿や紙コップによる製作は、見立てによるイメージの広がりから、製作展開した過去7年間の学生作品の事例を挙げながら、今日の学生がテーマと素材から学生が主体的に素材から思考し表現まで、作品の傾向を分析し今後の学生の製作学習の一助とする。

(2) 製作内容

本稿では既製品の紙皿、紙コップといった円や円筒（円錐形）の形態から見立て活動よっての発想から製作に繋げる、基底材としての材料の特性や加工の可能性を説明し、多くの保育の教材に繋がることを伝えている。材料用具は紙皿、紙コップ、ハサミ、フェルトペン、色画用紙、のり、セロハンテープ、ホッチキス等、学生の発想により造形室に準備してあるものなら使えるようにしている。

(ア) 紙皿（直径21cm）による見立て

①紙皿の円形を活かす発想による表現

紙皿について、幼児は画用紙を円形に切り、その形から見立てるプロセスを取ることができないことを伝え、手軽に手に入る紙皿、その円形から直接発想させることの意義を理解させ製作に取り掛かる。テーマについては植物や動物または日用品などの製作物を例に発想させるが、皿の円形をそのまま活かす発想、外形を裁断または皿をベースに色画用紙等で形を付加することによって成形することを伝え、あくまでも皿のものとの形が分からなくなる裁断や成形は禁止している。彩色については色画用紙やフェルトペンを使い、また描画についてもフェルトペンを使用可としている。

②紙皿を半分に折り曲げ、半円の形態から見立てる。

前記の紙皿を半分に折り曲げることにより半円形の形から見立ての基本形になる。皿という少し深みのある形態を折り曲げることにより、厚みのある半円形である。この課題も外形をベースに色画用紙等で形を付加することによって成形することを伝え、あくまでも折った皿の原型の形が分からなくなる成形は禁止している。形をフェルトペンでの描画や彩色さらに色画用紙の色を使うことを可としている。

(イ) 紙コップ（口径7.5cm、高さ8cm）による見立て

①紙コップの円筒形を人や動物等の顔、または胴体と顔、あるいは胴体のみを見立てる製作課題、紙コップの形態を活かしながら裁断、フェルトペンで描画と彩色、色画用紙で成形しても良い。

②紙コップの口の部分から両側をハサミで切り折り曲げ底の部分の口に見立てた製作折り曲げた底の部分を内側から指で挟みこみ「パクパク」と口に見立てることから発想する製作であり、人の顔や動物の顔の表現、さらに胴体、足と関連づける表現が可能である。

3. 作品考察

下記に学生の様々な事例の一部を挙げ考察する。

紙皿

A. 紙皿の円の形を活かした作品

皿の円形をそのまま器として発想し、製作する学生がいた。カレーライスやスパゲティ、ワンプレートランチなど様々な作品がある。

①カレーライスは色画用紙によるご飯とカレーのルー（茶色）を皿の上に分割して分け、その上から肉（茶色）、ニンジン（朱色）、ジャガイモ（黄色）を複数入れた構成である。学生にとっては具材の配置の工夫により配色バランスの意識が持っていた。幼児にはカレーのルーとご飯を分割してから、さらに構成するプロセスは困難と考えるが、他の材料で簡単に具材を表現できる方法などが考えられる。

②スパゲティは、オレンジ色の色画用紙を曲線に切り麺にみたく、トウモロコシ、ジャガイモの千切り、そして対比の強い緑色でピーマンの断面形でアクセントを入れている。今回は色画用紙を主に使用する素材の条件を出しているが、幼児においては、スパゲティの麺をより具体的な毛糸や紐などが利用でき、麺をイメージできるものを、幼児の目の届く範囲に置くことや要求に応じて準備できる配慮が必要である。皿の上に麺がのれば確かなイメージが出来あがり、さらにトッピングなどの動機づけと製作の発展に繋がる可能性がある。



写真-1 円を活かした作品（カレーライス）

（写真-1）

③時計は皿の外形から見たてのできる基本的な形であり毎年製作する学生がいる。学生は数字を色画用紙で作ってから貼り、長針と短針を回転できる機能に工夫をする学生もあり、構成的にも美しい作品を作ることができる。このような作品は幼児に時計の学習として見せることはできるが、幼児の製作物としては数字を切り抜くことは難しくフェルトペン等で数字等を描く方が容易である。この製作を通して数字や数、時間の概念に関わることができる。（写真-2）



写真-2 円を活かした作品（時計）

④その他、クリスマスリース、サッカーボール、動物の顔、金魚鉢（水槽）等の作品を作っている。

B. 紙皿に色画用紙を付加した作品

円形は花などの植物や人、動物の顔の基本的な形に見立てる傾向が強く、動物であれば耳などの特徴ある形を加えるだけでイメージ化できる製作物である。耳を色画用紙等で丸く付け、タヌキやクマ、パンダ、長い耳のウサギ、三角形でネコの耳の特徴を容易につかむことができ、さらに目や鼻、口といったそれぞれの特徴ある形をフェルトペンで描いたり、色画用紙で貼り動物の製作に取り組んだ学生が最も多かった。また耳以外に丸い形をカエルの目に見立てる学生もいた。

- ① 円形を花の種の部分のイメージを広げ、花びらを付けることにより向日葵の花を代表に他の種類の花をつくる学生がいる。花びらを比較的に丸くするか、鋭くするかによって花のイメージが違ってくる。幼児の場合は、要求を想定して花びらを用意することも考えられる。
- ② 動物の顔は学生の動物園や映像パンダなどのキャラクターやイラストレーションなどで多くの情報によって容易にイメージ化でき創作意欲が高かった。幼児も日々の生活体験で形を捉えやすい魅力的なテーマである。このことを意識し、幼児がつくる場合は単純な形を付加することで自ら様々なイメージを達成することができる。目など色画用紙等で貼り付けることにより造形的には強い表現になるが、発達段階に応じて、フェルトペンで描画するほうが容易に製作できる。皿の形態をベースに幼児のそれぞれの主体性のある発想を汲み取ることができる可能性を持っている。(写真-3)



写真-3 円に形を付加した作品（ネコ）

③その他、カタツムリなどの作品を作る学生がいた。

C. 紙皿 円に切り込みを入れた作品

この製作も素材を活かす視点から、切込みや他の素材を貼り付ける加工は最小限度にした方が見立ての意義を達成でき、幼児の技術的な観点からも押さえる必要がある。

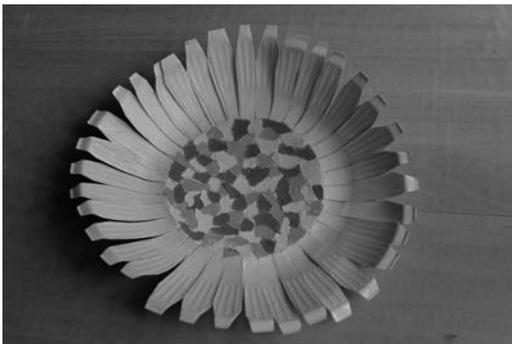


写真-3 円に切込みを入れた作品（ひまわり）

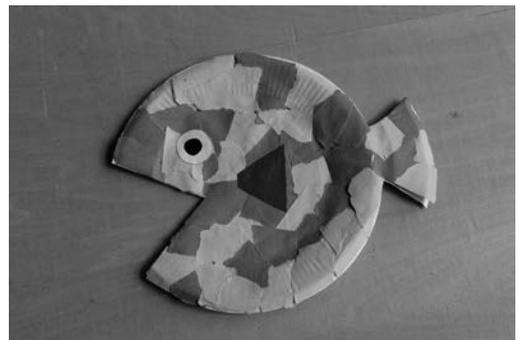


写真-4 円に切込みを入れた作品（魚）

ひまわりなどの花びら（額）の形態をハサミで切込みを入れ外形をつくる。さらに色画用紙でちぎり絵の手法で中心の種の部分色を表現する学生がいたが、紙皿の素材を活かし、フェルトペンや色鉛筆で彩色する学生もいた。前述しているが、部分の補足的な表現は、貼ることよりえがく表現をした方が幼児の教材向きである（写真-3）。

丸い形を魚の胴体を見立て、口の部分を扇方に切り取り、その形を尻尾に利用する発想をした学生がいた。円は美しい形であるが、その形態を切り取った形を魚の尻尾に使うことにより形の関連性が生まれ美しい造形物になる。この形態の上に青系を4色使ったコラージュの色彩効果も学生は考え、美しい造形物になっている。幼児の教材は紙皿の素地を活かした製作の方が容易である。（写真-4）

③ 紙皿をハサミで渦巻き状（スパイラル）に切っけいき中心部分を頭に見立てたへびを発想する学生がいた。頭部分から糸で吊り下げることによりリアルな姿になる。（写真-5）

④その他、パンダ、タヌキ、ウサギ、ネズミ、ライオン、魚、カメ、カタツムリ、テントウムシ、メロンなどの作品がつけられた。



写真-5 円に切込みを入れた作品（へび）

D. 紙皿を半分に分けた形態からの見立て

皿の半円の形を見立て切ったスイカの断面やオムライスをイメージ化された。

①スイカは切った断面から赤い部分と皮の部分を色画用紙又はフェルトペンで塗りつけられたが、単純な形態から幼児がイメージ化できる製作可能な表現である。

②オムライスもご飯を包まれたたまごの黄色にかけられたケチャップの赤を組み合わせオムライスが製作された。

E. 紙皿を半分に分けた形態に色画用紙等を付加した作品

半円形をベースに服や着物に見立てた人形や魚、鳥、かたつむりなどの作品が製作された。

①半円に尻尾を付けることにより魚の形態と類似し、さらに目と背びれなどを付けることによりリアルな作品を仕上げる学生がいた。学生は色画用紙を貼って表現をしているが、幼児の製作可能な作品はフェルトペン等による描画による装飾的な表現が現実的である。

②カタツムリは丸い皿の形を殻の部分に見立て、胴体を画用紙つくることが一般的であるが、半円を体に見立て殻を画用紙でつくった発想の学生がいた。(写真-6)

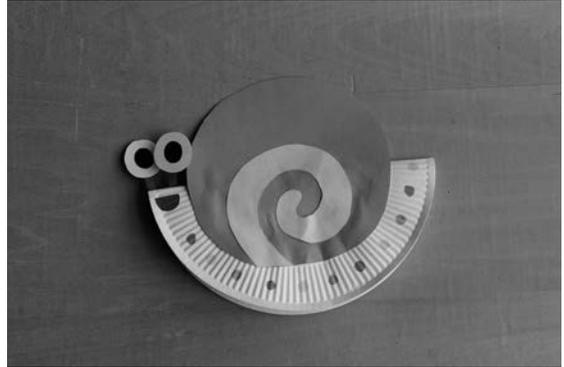


写真-6 半円に形を付加した作品(かたつむり)

③カタツムリと同様に丸い円形を甲羅に見立て、頭、足そして尻尾をつけ、カメを表現するのが一般的な概念であるが、カメを横から見た表現をする学生がいた。

④半円を着物のイメージに見立て、頭を画用紙、着物の襟もとを色画用紙で作ってお内裏様や、その他、カニ、鳥、恐竜、サンドイッチ、クレープ、人物の上半身などの発想がなされた。

F. 紙皿を半分に折った形態をシーソーにした作品

半円から見立てる学生、皿を半分に折っても構造的に密着しない特性を利用して円弧部分を動く機能に利用する学生がいた。

①半円をシーソーの機能を利用して、ニワトリの表現、頭を画用紙で付け、羽はフェルトペンで描いている。(写真-7)

②シーソーのように動く特性を利用して、半円に黄色の色画用紙を貼ることにより月に見立て、その弦の部分の両側に二匹のウサギを座らせシーソーをしている作品である。月に関連するメルヘンの世界を表現する学生はしっかりとしたポリシーを持って製作している。(写真-8)

③その他、ヤジロベエをつくり動く玩具として製作した学生がいた。



写真-7 半円をシーソーにした作品(ニワトリ)

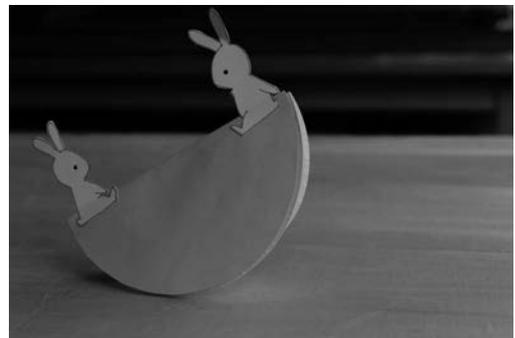


写真-8 半円をシーソーにした作品(月)

紙コップ

A. 紙コップの本体を顔又は胴体に見立てた製作

コップの形態から人、動物の顔や全体の姿を見立て、さらに部分的な形を色画用紙等に付け構成する作品と切り込みを入れて加工する作品も認められた。



写真-9 紙コップを見立てた作品（ペンギン）



写真-10 紙コップを見立てた作品（にわとり）

①動物の姿に見立てる学生については円筒形からペンギンの胴体を含めた顔の発想が認められ、背中の黒い毛に対して腹の部分の白い毛と胴体の両側の羽、さらには顔の表情として嘴と目、そして嘴と同じ色の足を付けることによりペンギンの美しい配色バランスも考慮されている。ペンギンの単純化した姿を上手くとらえた製作である。胴体に色画用紙を巻き付け、色を表現しているが、紙コップの円筒は円錐形の部分であり、そのことを理解できずに苦労した学生が多い。もちろん幼児には製作不可能な作業である。（写真-9）

②鶏の正面からとらえた顔の発想する学生もいた、鶏の白い色を紙コップを活かし色画用紙で黄色の嘴と赤い鶏冠（嘴の下にある部分）目と羽を付けるだけで鶏のイメージを表現している。（写真-10）

③その他、ウサギ、カエルなどや人の顔、の表現が認められた。

B. 紙コップに切込みを入れ構成する事例

①紙コップの底を頭に口の部分を約2.5cm切込みを入れ外側に曲げ蝟の足を表わし、さらに既成概念ではあるが口と目を色画用紙でつくり、色はクレパスで赤く塗る表現が認められた。同じ発想であるが頭の部分に色画用紙で三角形の通称耳をつくる学生もいた。（写真-11）

②紙コップの底を頭に口の部分を



写真-11 紙コップに切込みを入れた作品（タコ）

約3cm切込みを入れ外側に向かって曲線状に曲げ象の鼻をイメージし、さらに顔の両サイドに大きな耳さらには目と鼻の部分に皺を描き象の特徴を捉える学生がいた。

C. 紙コップの本体両サイドを切り開き、底を口に見立てた製作

牛乳パックの底を利用した、いわゆるパクパク人形であるが、幼児が紙をハサミで裁断する握力と表面のコーティングと印刷された上から紙を貼ったり、描画することを考えると無地の紙コップの方が教材に適している。製作にあたって紙コップの本体両サイドを切り開き、底の部分動く機能を持った口に見立てることにより、人や動物をイメージできる製作である。

A. 顔と胴体、足の部分を切り取り成形した作品

①口の部分から頭と胴体をイメージし、つくったカエルで、動きの伴った美しいバランスの作品である。幼児は色や部分的な形はフェルトペンで描き、単純な形態でつくることができる。(写真-11)



写真-11 紙コップの底を口に見立てた作品 (カエル)

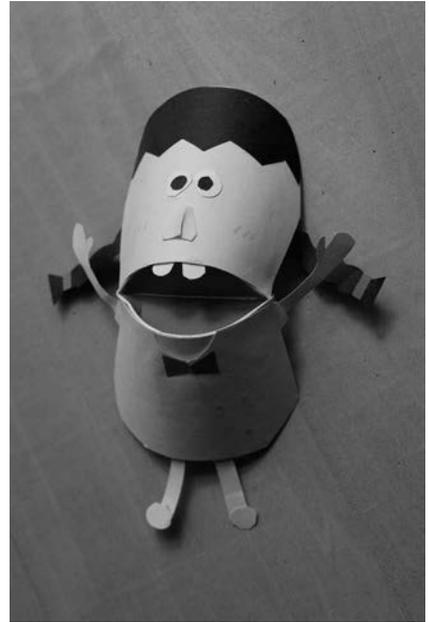


写真-12 紙コップの底を口に見立てた作品 (女の子)

②外形のシルエットを切り取ることは困難な作業になるので、基本的な形態から部分は色画用紙で形を補うことができる。おさげ髪の女の子はシンプルな土台となる頭と胴体から表現している。(写真-12)

③その他、タヌキ、パンダ、ネコ、ウシ、クマなど様々な動物をつくっていたが、一連の課題にそぐわないが動く機能から蝶の羽に応用した学生がいた。

4. まとめ

紙皿や紙コップなど日常品からの「見立て」による製作の意義は保育者を目指す学生にとって下記のようにまとめることができる。

- ①生活体験からイメージを表現する製作経験の少ない学生にとっても、丸い形など単純な形態から明確なイメージを引き出すことができる。
- ②着想、発想、構想そして製作につながる製作のプロセスにおいて、製作の計画が立てやすい。
- ③日常品を工夫することにより、具体的なものに見立てることの楽しさと製作、経験が容易くできる。
- ④紙皿、紙コップなどの上から描画することが容易である。
- ⑤素材を裁断しやすく色画用紙など他の素材を付加することにより構成する楽しみを経験できる。
- ⑥パクパク人形などは口などの動く機能からの見立て活動により、使って遊ぶことへの興味を持ちながら製作の動機、関心を持つことができる。

以上のような意義を挙げることができるが、まずは製作の動機的な面を考えるなら、紙皿紙コップの形体を活かすという条件が限定されたことにより、発想の起点がはっきりしていること。少ない構成要素の製作であり学生の生活経験から直感的に具体的なイメージが広がりやすく、工夫することへの興味と意欲を持ちながら、能動的に製作活動に繋げることができた。学生それぞれの達成感から積極的に他の学生の発想法や素材を工夫し活かし方を知ることができ、多くの教材の情報や製作の可能性を知る機会となった。これらの学生の製作体験で得た発想や技術的なことを通して幼児の発達段階を踏まえた現実的な教材へとつなげることができ、製作においてのねらい、材料の選択、加工などの技術的な面から材料の選択などを通して助言のポイントを知ることができた。今回は紙皿、紙コップによる「見立て」による製作の考察であったが、今後は実際に幼児が製作を通して、保育者誘導型として、設定されたテーマや条件の中で幼児が自らの発想でどれだけ自主的に製作に繋げることができるかを検証していく予定である。

引用文献

- 1)、2)、3) 槇英子『保育をひらく造形表現』 p92・p95 萌文書林 2008

参考文献

- 1) 岩田健一郎 船井武彦『こどもと造形 I』近畿大学弘徳学園 2015
- 2) 船井武彦『こどもと造形表現 I』近畿大学弘徳学園 2015
- 3) 槇英子『保育をひらく造形表現』萌文書林 2008
- 4) 東山明編『絵画・製作・造形あそび百科』ひかりのくに 2005
- 5) 辻泰秀編『幼児造形の研究』萌文書林 2014